The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂の和学書目並解説
Author(s)	八木, 毅
Citation	語文. 1954, 10, p. 40-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68440
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂の和学書目並解説

八木　毅

一　三宅萬年

名は正名、字は実父、石庵又は萬年と号す。寛文五年正月十九日京都三条に生る。享保十五年七月十六日歿、寿六十六、河内神光寺に葬る。

1 萬年先生遺墨帖　一帖（懐徳堂文庫蔵）

遺墨断簡集であるが、中に、和歌や俳句も含まれてゐる。

二　中井甃庵

名は誠之、字は叔貫、甃庵と号す。元禄六年九月廿九日播州龍野に生る。宝暦八年六月十七日歿。寿六十六、八丁目寺町誓願寺に葬る。

2 とはすがたり　一巻　半紙判刊本

3 和歌和文集　未刊

4 春のことば　一巻　未刊

5 新題和歌　未刊

三　五井蘭洲

名は純禎、字は子祥、通称藤九郎、蘭洲・洌庵・梅塢と号す。元禄十年大阪に生る。宝暦十二年三月十七日歿。寿六十六、八丁目寺町実相寺に葬る。

6 勢語通　四冊（内巻二、外巻二）美濃紙袋綴　宝暦元年十二月成

自筆本（懐徳堂文庫蔵）

丸山盛紀筆本（吉永　登氏蔵）四冊

活字本二冊　明治四十四年刊（懐徳堂紀念会刊行）

本書の詳細については本文「勢語通について」を参照のこと。

7 源語提要　三冊　半紙判写本（吉永登氏蔵）

第一冊　源氏物語をよむ凡例及本文桐壺よりよもぎ生まで

第二冊　せきやよりかしはぎまで

第三冊　よこぶえよりゆめのうきはしまで

巻の解題と本文の抜粋、註を本文の行間に書きこむ。凡例に、著者の源氏物語観を述ぶ。

8 源語詁　三冊　半紙判写本（吉永登氏蔵）

部門別いろは順に源氏物語の語彙解説

第一冊　天文・地理・時候・居所・宮室・鬼神・虚詞

第二冊　人倫・支体・草木・禽獣・蟲魚・服食器財

第三冊　人事部

源語詁を源語梯と改題して安永十年近江犬上川のほとりなかつかさの序文を附し出板せるものあり。のち、天明乙巳歳夏、中井竹山の源語梯弁を附して再板。

78については本文「源語提要・源語詁について」を参照

9 万葉詁　三冊　半紙袋綴写本（吉永登氏蔵）

萬葉集中の語句を巻一天文時候・巻二鬼神人倫支体・巻三態芸事為・巻四虚詞助辞にわかち、各巻いろは順に配列して略解したもの。

写本には他に四冊本五冊本がある。それらには巻首に寛政九年十月高津中川昌房の序（純禎の歌並びに此書のことを述べてゐる）と巻末に萬葉集凡例のあるものもある。

10 新題和歌百首　一冊　半紙袋綴写本

五井蘭洲の百首の題詠歌に倣って川井立牧・加藤竹里も同じやうに題詠した和歌の集。月中漁艇　散楽　戯坊（カブキ）　機関（カラクリ）　医煙草　乞食　盗　老妓　西施　謡史　日本武尊等の新題一題一首である。

機関

みるがうちに人も草木も波のうへに掉ささぬ舟の行まかふ也

老妓

もとゆひのみたれて霜とふるされし昔をいまは忍ぶもぢずり

蘭洲の作例を挙げれば右の如くである。

桂山（川井立牧、名は雍）の百首の終りに

右倣五井蘭洲新題百首　宝暦四年甲戌二月　桂山

とあり。桂山は詩を梁田蛻巖に、歌を長伯に学ぶ。明和三年七月二十日歿、寿五十九。医を業とし、懐徳堂のあった尼崎町の町年寄であった。その家集を桂山集といふ。

11 蘭洲茗話　上下二巻　一冊（刊本）

明治四十四年十月懐徳堂紀念会より出版、発行所大阪心斎筋松村文海堂、蘭洲の随筆である。蘭洲研究には一見すべき書である。

12 古今通　二十巻　八冊　蘭洲自筆稿本（懐徳堂文庫蔵）

古今和歌集の注釈書。上野の国立国会図書館その他にも写本がある。それらについては本文「古今通について」を参照のこと。

13 蘭洲先生詠歌大概古今序紀聞　一冊　写本（大阪府立図書館蔵本）

旧注を参照して詠歌大概・古今序を注釈したもの。巻末にしるされた語には朱子学者らした見解がのべられてゐる。

14 刪正日本書紀　四巻　未刊　写本

四　中井竹山

名は積善、字は子慶、通称善太、同閲子・渫翁・雪翁・竹山などと号す。享保十七年生る。文化元年二月五日歿。寿七十五、八丁目寺町誓願寺に葬る。

15 万葉仮音　未定稿不分巻（未見）

五　中井履軒

名は積徳、字は処叔、通称徳二、履軒幽人と号す。享保十九年生る。文化十四年二月十五日歿。寿八十六、八丁目寺町誓願寺に葬る。

16百首賛々　活版本　一冊　明治廿五年十一月　中井木菟麻呂刊、博文館発行

百人一首に注釈を施したもの。これには所々に異説が示されてゐる。「春すぎて」の歌の注に、「香山ハ大山也大和河内ノ彊ナル葛城二上龍田金剛山ナト一帯ノ連山ノ総名ナリ甚ノ勝景ナレハニヤ香山ト名付ケラシ萬葉ニ同ク御製アリテ中ニ海原海鷗ノ句アリ証トスベシ大和ニテ茅渟海ヲ望コトハコノ一帯ノ山ヨリ外ニハナシ畝火耳無ナドノ小丘ニテカカル眺望ノ勝景アルベキヤ」とある。

17履軒先生和文集　乾坤二冊　半紙本写本（懐徳堂文庫蔵）

乾、華胥国歌合・昔の旅

坤、華胥嚮語・華胥国記・与竹里翁・世のたから・巴歌集序・ふきのことは・歌のすかた・夢路草枕・しのふ摺・しからみ・くれなゐ・長き夜・ねのひ・歌のすかた（コレハ前ノ歌のすがたトハ内容異ナリ）かすめ歌・百首考（コレハ百首賛々ノ冒頭文ナリ）破腹巻記

18雕題伊勢物語　二巻（未見）

19雕題古今和歌集　二巻（未見）

七　加藤信成

幼名源吉、通称清右衛門又源四郎、右門（禹門とも）と称し、字は子原、季朔、休々亭などと号す。貞享四年十二月朔生、寛延四年六月二十四日歿、寿六十五。学を五井持軒、三宅萬年、三輪執斎に受け、歌学を烏丸光栄に、医を後藤艮山に学び、儒医を以て身を立てた。加里竹里の父。

20承露吟草

家集である。

八　加藤竹里

名は景範、通称小川屋喜太郎（のち友輔と改む）号は竹里（たかさと）又居貞斎　享保五年五月朔生、寛政八年十月十日歿、寿七十七。

21加藤竹里書簡集　二帖（懐徳堂文庫蔵）

内容は有賀長収贈答書簡その他、文反古　貼交ぜ

22蔵山集　一冊　写本　安永四年手写　大形本（住吉神社御文庫蔵）

加藤景範撰　序並本文自筆　跋中井竹山自筆

仝　板本　一冊　半紙本

安永四年十一月　景範編輯　浪華書肆　堀内庄兵衛。

住吉神社に奉納のため廿九人の歌人から歌を求め、春夏秋冬恋雑に部類したもの。

⊙難蔵山集　小沢芦庵著　蔵山集を刊行したことに対して芦庵は神に奉納した歌を出版して広めるといふことは売名的行為なりと非難し、蔵山集の歌を適宜抜き出してそれにつき非難を加へたもの。それ故に上記板本から芦庵の歌は削ってある。

23和歌用字みなれさほ　一冊　半紙半截本

寛政四年七月刊行　浪華書舗　柏原屋佐兵衛、小川屋六蔵板。

和歌に用ひる単語を天文・歳時以下十八項目に分類して並べたもの。

24国雅管窺　一冊　美濃袋綴板本

享和二年五月刊行　浪華書舗　柏原屋清右衛門、小川屋清右衛門蔵板。

有賀長収の序がある。初学者のために和歌の作法についてのべたもの。勿論和歌の本質についても述べてゐるが、特に景範の自説とみとむべきものはない。

25和歌実践集　五冊　美濃袋綴板本

寛政七年七月刊行　浪華書肆　岩崎徳左衛門、加藤源蔵、同清右衛門蔵板。

勅撰集から実作の模範となる歌をえらび出してそれを春夏秋冬　恋　賀　哀傷　離別　羇旅　雑に部類し、さらに題によって分類して掲げたもの。

26古今通補　（未見）

前記12古今通に施した補注。

27源語解　（未見）

28勢語通註　（未見）

29万葉趨避　（未見）

30みやびこと玉かつら一冊

31国詞叢録　一冊

竹里の養嗣子敦善編纂にかかる竹里の和文集

32秋霜親筆　一冊

右33国詞叢録に対して詠草としてやはり教善により編輯されたもの

33和歌虚詞考　二冊　半紙袋綴本

寛政元孟春刊行　浪華書舗　柏原屋清右衛門他五名による板行。

内容は「虚詞といふは、たとへば、いとどしく、はへ（ふりはへ・うちはへの類）はた、さすが、中々、をのづからの類也　此一つの虚詞にさまざまの心のかはりあり　此書は和歌の虚詞をあつめ、証歌を引いて、委しく注釈を加へたる也和歌を学ぶもの肝要の書なり」とある本書の袋の栞内によって大要を得てゐる。要するに和歌に用ひる副詞・接続詞・助詞・形容詞・接尾語などの「虚詞」を分類解説引例したものである。

34新古今集旧注補遺　一冊　写本（九州大学蔵本）

同表題のもの二冊ありて、うちの一冊は無罫美濃袋綴の草稿本。他の有罫の方は清書本。清書本の方には草稿本の前半部しかない。草稿本は全二十巻の中から二百数十首の歌を選んでこれに注解を施したもの。

主として北村季吟の八代集抄の批判と自見の説述。旧派歌人としては旧注に捉はれてゐないところが良心的。季吟の注に対するその批判は全く儒教道徳的立場。新説に乏しく創見も少く、難解歌は余り扱ってゐないので注釈史的にはさして重要なものとはいへないが旧注系統では異色あるも

の。

35 六吟百首和歌　一冊　写本（住吉神社庫蔵本）

竹里の手写。寛政四年九月十九日。幸栄・転以・堯智・恭貞・惟直および竹里の六人が集って一夜に百首題を詠み、神前に納めたもの。

36 奉納月次和歌　四冊　写本（住吉神社神庫蔵本）

竹里らの同志が集って寛政二年より同五年に至る月次の詠出歌を、年毎に浄書奉納したもの。その二年の巻が千里の手写である。

37 積翠集　一冊　写本（住吉神社神庫蔵本）

妻屋秀貞の詠草。竹里の添削並写、跋がある。

38 和歌三題集　一冊　袖珍本　安永六年刊（大阪府立図書館蔵）

故事まで含めて和歌に用ひる詞を分類して注したもの。

第一部和歌浜づと　目録に、天象（天・日・月……）歳時・方位・地儀・国部・居処・神社・仏寺・草・木・鳥・獣・昆虫以下八項。

例―天象、天（あま）すめるはそら　―の原　―つ空　―の戸。

第二部名所ついまつ　寛政四年の序・凡例につづいて　山・嶺・谷・柚以下五三項目がある。

例―山、いなり山　初午・梅・花　拾滝の水かべりてすまは稲荷山七日のほれるしるしとや思はむ　附録　園・氷室・隈・窟。

第三部美那礼棹　天文・歳時・方位以下十六項。巻尾に萬葉仮名の分類表を掲ぐ。

39 補遺名所ついまつ　一冊　袖珍本　写本（大阪府立図書館蔵）

序・奥書ともにない。全七十六枚。山・嶺・柚・坂・岡・路・関などの分類によって各地の歌枕をあげ、例歌を引用してゐる。夫々の項には簡単な解説もついてゐる。

例―原　檜原・松原・萩原・かや原など原の題ニかなはす野に同しくうちひらきたる所を云。

山、いふき山　近江なり　伊吹の外山・さしも草・嶽・――おろし・――のみね・――里　新古逢事はいつといふきの嶺に生ふるさしも絶えぜぬ思なりけり

40 閑吟驢旅百首　一冊　大形本　写本（大阪府立図書館蔵）

植村雪翁、景範の斧鉞を得た旅の歌百首を集めたもの。雪翁自序あり。四季・雑に部類す。巻末「旅の歌百首よみて、添削をこひける詠草のおくに書つけ侍る」とあって、景範・維足・通央・定昌などの歌がある。最後に明和三年の跋を附す。（四　中井竹山の項に入れるべきもの）

41 芳埜日記　一冊　半紙版袋綴　写本（大阪府立図書館蔵）

扉に、加藤千里師　芳埜日記　とあり、奥に、「文化元甲子秋、尾崎氏社中本之内抜萃写之」と記す。裏表紙内側に、「沢辺氏」とある。慈延禅師にさそはれ、景範・長収など歌このむ人々吉野に同行した時の紀行で、所々に頭注を附してゐる。

例—本文で「水駅」とある上に、「水むまや食物ナシニ湯茶ハカリアリ茶店」

本文の終ったあとに景範の和歌三首がある。

42加藤千里文集　一冊　半紙判袋綴　写本（大阪府立図書館蔵）

上巻には四国讃岐から淡路島にかけての旅の文「西遊紀行」が入ってゐる。

中巻「旱のことば」「伊勢路の記」（明和八年、一七七一）「但馬日記」（明和九年）「岸上野のことは」「馬山記」（安永二年・一七七三）「五美堂記」（安永三年）…「蔵山集序」など十五篇の文があり、「岸上野のことは」の末尾に、「竹里原稿には刪るべしと書り、出して一篇とし、ひそかに蔵す　牛尾介」とある。

下巻「観濤録」（天明元年、一七八九）長収の歌も入ってゐる。その他二篇。

この文集は明和年間から寛政の初年にかけて約二十年間の文章を集めたもの。編者は前紀牛尾介なる人であらうか。

43和歌浜のまさご　一冊　半紙判袋綴　刊本（大阪府立図書館蔵）

類歌集である。巻初に「浜のまさご恋上目録」とあり、寄天恋・寄日・寄月・寄星など寄物的部類多数。板元は書林中野六右衛門。但し刊行年月の部分は裏表紙にのり附けしてあるために分らない。

44かはしま物語　一冊　半紙判袋綴　刊本（大阪府立図書館蔵）

中井履軒の漢文序、中井竹山の漢文跋、附録に「きみのことば」があり、本文の奥に「明和庚寅七之冬　加藤景範撰」とある。ある孝子を扱った和文の実録小説。

同（孝行物語）　一冊　写本（東京大学蔵本）

45何世語　一冊　半紙袋綴　自筆稿本（大阪府立図書館蔵）

明和元年（一七六四）の中井竹山漢文序があり、奥に、

此物語たか作れるやしらすさいつころ吉野に遊歴せし時同宿せし翁のみせ侍しを写しとり侍る也つくつくと見侍るに古き物ともしらすかの翁好事のものとおほえしかもしみつから書るにやと思はれ侍る

とある。一種の擬古物語である。

46竹葉露　五巻　巻子本自筆草稿（大阪府立図書館蔵）

主として竹里の詠草をその孫が類聚したもの。

47和歌浜づと　48松の下露　49間思随筆

右47—49の三部は大阪市立大学図書館の森文庫旧蔵目録中にあるが、書物は同図書館に入ってゐないといふ。